【別紙 2】

審査の結果の要旨

氏名　木村美也子

本研究は、知的障害児に続く妊娠、出産における意思決定過程、及び障害児ときょうだい児養育過程における母親の困難と対処に着目し、知的障害児とその家族にとって望ましい環境を構築するための実践的示唆を得ることを目的としたものである。これは、研究Ⅰ、Ⅱの２つの研究により試みられた。研究Ⅰは、知的障害児に続く妊娠、出産の意思決定過程における母親の困難と対処を、障害児の出生順序と障害の原因が特定されるものか否かを考慮した上で探究し、理論化することを目的としたものである。研究Ⅱは、知的障害児とそのきょうだい児養育過程において、母親がどのような困難に直面し、どのような対処を行っているのか、きょうだい児の障害の有無の違いを考慮に入れ、検討し、理論化することを目的としたものである。そして、研究Ⅰ・Ⅱから下記の結果を得ている。

1. 知的障害をもつ母親の次子妊娠・出産の意思決定過程における困難への対処という現象は、【納得する変化を得るための挑み】であった。そして、《障害との出会いによって余儀なくされた変化への納得できない思い》、《次子誕生による新たな変化への期待と不安の比較考量》、《次子障害の可能性に関する情報収集》、《今以上に厳しい状況に変化する可能性を避け、次子誕生を諦める》、《新たな変化を求めたことを否定的に考えない姿勢》、《次子が得られない状況で、次子を求める気持ちの継続と諦めとの葛藤》、《新たな変化を求めて次子妊娠を試みる》、《次子妊娠実現による家族の変化の開始》、《次子出産を考えずに、自分の姿勢を変えてゆこうとする姿勢》の 9 つのカテゴリーが抽出された。

2. 母親たちは、知的障害児が第一子の場合は自分自身や障害児の現状に納得できず、第二子以降の場合は、年長子(健常児)や家族全体の現状に納得できず、新たな変化をもたらしてくれる次子を求めていた。

3. 知的障害児がダウン症など染色体異常である場合と、発達障害など原因不明の場合とで、母親の《次子障害の可能性に関する情報収集》は対象的であった。次子障害の可能性について、検査と数値で情報提供を受けることができる染色体異常児の母親に比べ、原因不明の障害児の母親は、周囲の言動から次子障害の可能性を推察し、不安を高めていた。

4. 大半の母親は“納得できない”思いをもち、次子誕生による新たな変化(納得できる変化)を求めたものの、実際に次子出産に至った母親は半数に満たなかった。次子誕生に期待を託す考えを切り替え、自身が主体的に変化しようと試みた母親は、“納得できない”思いを軽減することが可能になっていた。その一方で、次子誕生による新たな変化を望みながら叶えら

れない母親は、“納得できない”思いに長期間苦悩していた。

5. 知的障害児ときょうだい児養育過程における母親の困難と対処とは、【『がんじがらめ』状態から抜け出すための試み】であり、《A.自分が必要とする支援や子どもに適した居場所を獲得することの難しさ》、《B.家族それぞれに時間や手をかけることの難しさ》、《C.将来を見据えることの難しさ》、《D.障害をコントロールすることの難しさ》、《E.家族がうまくやってゆくことの難しさ》、《F.「なぜ自分ばっかりが」という思いを遠ざけることの難しさ》、《G.障害児やその家族に対する厳しい目、決めつけとの遭遇》の 7 つの困難がみられた。これらは単独で母親に影響をもたらすだけでなく、互いに連鎖し合うことで、「がんじがらめ」の状況を作り出していた。これに対し、《1.つながりをフル活用して情報を得る》、《2.自分の姿勢や状況を変えることで支援を得る》、《3.別な状況との比較や成功体験により「何とかなる」と考える》、《4.気持ちが落ち込む状況を避ける》、《5.健常者・健常児との交流により「わかってもらう」機会を増やす》の 5 つの対処を示すカテゴリーが抽出された。この対処カテゴリーも、互いに影響し合い、困難カテゴリーの１つ１つに、或いは７つ全ての困難を軽減すべく働いていた。そして、対処によって困難が軽減された場合、《帰結Ⅰ.少しずつ状況が良くなっているとの思い》へ、軽減されなかった場合は、《帰結Ⅱ.がんじがらめの日々の継続》へ向かうことが確認された。但し、困難との遭遇は、子の成長過程において、次から次へと起こっており、母親の多くの母親は、帰結Ⅰ、Ⅱの間を行き来しているものと考えられた。

6. 知的障害児ときょうだい児養育過程における母親の困難は、障害児が一人の場合と、障害児が複数の場合とで、異なっていた。障害児が一人で他のきょうだい児が健常児の場合は、きょうだい児の行動制限など、きょうだい児の負担に対する呵責が母親に苦悩をもたらしていた。一方、障害児を複数養育する母親からは、不公平感や他者に特別視されることへの恐れ、そして子の障害の特徴と男女差によって異なる対応の難しさが示された。

7. 知的障害児ときょうだい児養育過程の困難に対し、情報・支援・理解を得ようとする、自分の受け止め方を変えて現実との間で折り合いをつける、といった 2 つの対処がなされていた。これらは問題焦点型戦略、情動焦点型戦略に相当するもので、肯定的認識や楽観主義、コントロール感覚が、その対処の動力となっていた。

以上、本論文は知的障害児の母親の次子妊娠・出産の意思決定過程における困難と対処、及び障害児ときょうだい児養育過程における困難と対処を母親の体験から明らかにした。本研究は、これまでほとんど焦点があてられることがなかった知的障害児の母親の体験を描き出すことで、知的障害児の家族研究、障害受容研究、及びストレス対処研究に重要な貢献をなすものと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。